

対馬のアムールカナヘビ (予報)*

柴 田 保 彦
大阪市立自然科学博物館

Preliminary Report on *Takydromus amurensis* PETERS from Tsushima (Reptilia: Lacertidae)

Yasuhiko SHIBATA

The Osaka Museum of Natural History

Abstract: Three preserved specimens of *Takydromus amurensis* PETERS were found at northern Tsushima. These specimens, deposited in the Hitakatsu Junior High School, were said to have been collected from surroundings of Hitakatsu Town. It is new record of this species to the fauna of Tsushima.

Diagnoses and general descriptions are given.

I. は じ め に

1965年5月、対馬北部で中学校の標本となっている *Takydromus* 属のカナヘビ3個体を見出した。これらの個体は日本本土に普通なカナヘビ *Takydromus tachydromoides* (SCHLEGEL) ではなく、アムール・朝鮮半島・中国東北部より知られるアムールカナヘビ *T. amurensis* PETERS と考えられる。

3標本は上対馬比田勝の比田勝中学にあり、それぞれ別々の、ありあわせの酒びんなどに液漬となっていた。採集データは付されていないが、中学校で聞いたところでは、学校付近で生徒が採集したらしいとのことである。標本と同じびんに入っている他の動物の種類・びんの形・いっしょにある標本類の状態から、ほぼ現地で採られたことに間違いのないと思われる。念のため、上対馬町教育委員会であずねたところ、戦前の博物標本などが移管などによって中学校の標本となった事実はないようである**。

このほか、対馬での棲息について現地の自然研究者の談話も傍証となる。この種らしいものは対馬中部の豊玉村千尋藻〜曾の道路わきで1965年春に目撃されているし(乙宮中学校教諭・鴨川誠氏談)。

* 大阪市立自然科学博物館業績 第100号

** 対馬の巖原高校(元の対馬中学)の標本室にはラベルのないトノサマガエル・スズガエルなどの標本があり、これが対馬産と誤って記録されたことから混乱をひきおこしている。このようにラベルのない学校標本が危険なことは十分に承知しているつもりである。

戦前には巖原町の対馬中学（現巖原高校）のうら山で採集されたことがある（巖原町・歌野吉甫氏談。氏は舌が二分しているのが印象に残っていると話された）。ただし残念なことに標本は残っていない。

このように現在のところ確実な産出記録に欠けるが、とりあえず比田勝中学標本についての報告を行なった。

今後さらに確実な標本を得る努力をつづけたいと考えている。

3 標本をお貸しいただき、研究を許された比田勝中学校理科主任の瀬尾吉章氏、助言を賜った歌野吉甫氏、対馬の動物について色々とお教えいただいている鴨川誠氏に厚くお礼申し上げる。

II. 標本について

標本は1幼体と大型の2頭の雄である。体を曲げて固定されており、恐らく生きたものをそのまま固定液に投入したらしく思われる。このうち1♂（No. 1の個体）についてややくわしく記載し、他のものは簡単に相異点をあげた。主要な特徴は table 1 に示した。

1) No. 1 (♂) の記載

頭部：吻端板 *rostral* は上方で前額鼻板 *frontonasal* に接し、上鼻板 *supranasal* を左右にへだてている。前額鼻板は前方で吻端板に、側方で上鼻板・前頬板 *anterior loreal* に、後方では前額板 *prefrontal* に接している。鼻孔 *nostril* は上鼻板・鼻板 *nasal* の間に開き、下方は第1上唇板 *1st upper labial* に接する。左右の前額板 *prefrontals* は互いに広く接している。前頭頂板 *frontoparietals* は前額板よりはるかに長く、背面中央で左右が広く接している。後頭板 *occipital* は小型で頭頂間板 *interparietal* の約半分の長さである。左右の頭頂板 *parietals* は後頭板と頭頂間板の間でわずかに接し合う。眼上板 *supraoculars* は、前方に1個の小型鱗、つづいて大型の2個、この後方に小型の1個、計4対ある。大型鱗は前方のものが後方のものよりやや大、前方の小型鱗は大きくて、後方の小型鱗よりやや小さい程度である。頬板 *loreal* は、左側では前方に1個、後方は上下の2板の2枚に分れている。右側は前・後方各1個。上睫板 *supraciliaries* は4個あり、第1上睫板は長く前方は後頬板 *posterior loreal* に接する、第2上睫板は第1上睫板よりやや長く、第4～第5を合わせた長さよりも長い。上睫板は上方では眼上板に接し、接線上にはわずかに左側2個、右側4個の小粒鱗を介在している。くわしくいえば、第2～第3および第3～第4上睫板接点に各1個（両側）、第1～第2上睫板接点に1個（右側）、第1（前方の小型鱗）～第2（前方の大型鱗）眼上板の接点に1個（右側）である。側頭板 *temporal* は前列3個で第4眼上板につづき、これとほぼ同大。後列は4個で最上部の1個は細長く、その後方につづく3個の小鱗とでもって頭頂板をふちどっている。上唇板 *upper labials* は7個。第5上唇板最長で眼の下方に位置し、上縁に近く前方へ走る隆条があり、この隆条は眼前下板 *subpreocular* の隆条へ接続する。下唇板 *lower labials* は6個。咽頭板 *submaxillaries* は4対。第1対は正中線上で接し、第2対は前方では互いに接するが後方ではクサビ型に介入する *gular scales* によって左右に分けられる。第3・第4対は互いにはなれている。*gular scales* は小さく平滑、前方では体軸にそって細長く、後方へ行くにしたがって横に長い長円形にうつり変わる。さらに頸環板 *collar* 前方では弱い隆条をもち、後端のにおく尖るやや大型鱗にうつり変わる。左右の第2咽頭板の間から頸環板までの間に、正中線にそって約32個の鱗がある。

胸部：前肢基部と後肢基部間の背面では大型鱗は25個、8列にならぶ。8列のうち、中央の2列はやや小型の鱗からなり、幅が狭くて部分的には不規則にならぶ。背板鱗の中央部には著しい隆条があり、後端は尖り、この隆条は前後につらなって明瞭な隆線を形づくっている。最外列のすぐ外側は、隆条をもつ小型鱗1列によってふちどられている。この小型鱗について、尖った粒状鱗6～7列がならび、これと腹板の間には隆条をもった小形鱗が4

～5列ならぶ。このうち腹板に接する1列が最も大型。前肢基部の後方や、後肢基部前方では、この小型鱗は数が多くなり、粒状鱗にうつり変わっている。腹板 **ventrals** は8列。外方の1列は強く、次の1列は弱く隆条をもち、後端は尖って背板に似た形を呈する。内方の4列は隆条なく扁平。後端は波形となり、にぶく2突起をもつ。頸環板と肛板の間に24個が縦にならぶ。

尾部：肛板 **anal plate** は横に長い長円形で扁平。側縁は2個の小鱗と、これに続く舌状の中型鱗でふちどられ、前縁は扁平な大型鱗と、これより小さい鱗1対に接している。鼠蹊孔 **inguinal pores** は3対。尾は、いちぢるしい隆条と棘状の後端突起をもつ長方形の鱗で規則正しくおおわれている。背面の鱗は腹面のものよりやや大型。

四肢：前肢第4指下面には21(左)・19(右)個の指下板を有する。後肢第4趾下面には27(左)・28(右)個の趾下板を有する。これは部分的には左右に分れている。

色彩：液漬であるのでかなり不明瞭であるが、大体の傾向を次に記す。青味を帯びた灰褐色で、いくつかの背板後端は赤褐色の小点または小斑で染められている。特に最外列の背板はほとんどすべて斑紋を有する。吻端板の側方から鼻孔を通り、眼の前方へ達する細長い赤褐色斑がある。これは眼の後方では頭頂板の側方をふちどり、耳孔の上半を過ぎて、胴部の粒鱗部をおおいながら尾の基部に達する。前肢より前方では、この暗色斑の下縁は特に色が濃く、この下は淡色の帯状紋にふちどられる。淡色紋下縁は、とぎれがちの濃色小紋でふちどられている。上唇は色がうすく、青味が強く、不規則な点状紋がある。下唇もほぼ同様。腹面は淡色。

2) No. 2 (♂) の主な相異点

前額鼻板は後方外端で後頬板の上方前縁に接する。後頬板は各側に1枚。頭頂間板と後頭板は接する。前方にある小型の眼前板は後方の小型眼前板よりはるかに長い。眼前板と上睫板との間の粒状鱗は左側4個、右側3個。鼠蹊孔は4対。背板は8列で、背中線上にはこれより小さい鱗列を不規則にはさみ、部分的には9列となっている。

3) No. 3 (幼体) の主な相異点

眼前下板は左側で前後の3枚に分れ、後方の2枚には強い隆条がある。右側では前後の2枚に分れ、前方鱗には弱い、後方鱗には強い隆条がある。頭頂間板と後頭板は接する。前方にある小型の眼上板は後方の小型眼上板とはほぼ同大。眼前板と上睫板との間の粒状鱗は各側に1個で大型、2個の大型眼上板の接点に介在する。鼠蹊孔は4対で、さらに右側の最外部に痕跡的な1個をもつ。背板は胴の中央部で9～10列あり、背中線に近い1～2列が不規則になっている。

III. 標本の主要な特徴と検討

分類学上重要と考えられている鱗板の特徴などは table 1 に示した。

Table 1, Diagnoses and dimensions of Hitakatsu specimens

No.	rows of longitudinal dorsal scales in mid-body	inguinal pores (left-right)	granules between supraoculars and supraciliaries (left-right)	head and body length in mm.	tail length in mm.
1 ♂	8	3-3	2-4	59	163
2 ♂	8 (partly 9)	4-4	4-3	57	145
3 young	9~10	4-4+(1)*	1-1	31	missing

* outer one rudimentary

1) *T. tachydromoides* との比較

わずか3個体なので個体群の変異の幅や頻度は明らかでないが、日本本土の *T. tachydromoides* とは明らかに異なっている。

手元にある近畿地方産の *T. tachydromoides* 61頭では大型の背板数は安定して6列、背中線上に不規則な小型鱗列を1列もつものも稀れではないが明瞭に8列のものは見られない。また鼠蹊孔数も次のように2対のものが大多数である。

1-1+(1) … 1頭	(1)+2-2+(1) … 3頭
1-2…………… 1頭	2-3…………… 2頭
2-2…………… 51頭	3-3…………… 3頭

〔例えば2-3は左右の別なく片方に2個、片方に3個あることを示す。〕

STEJNEGER (1907) も日本産の67頭を調べて、2対がかなり安定した数であるとのべている。

眼上板と上脛板の間の粒状鱗* は、*T. tachydromoides* では各側にふつう7~10個で、第1上脛板より後方で眼上板と上脛板をへだてて1列となっている。ただし稀れには3~22個の幅をもって変異がある。

大型眼上板の前に位置する小型鱗は、比田勝標本では、大型眼上板の後方の小型眼上板とほぼ同大か、むしろ大きい。ところが、*T. tachydromoides* では、これは眼上板に含めて数えないほどに小さく、後方の小型眼上板（いわゆる第3眼上板とよばれるもの）の $\frac{1}{3}$ ~ $\frac{1}{4}$ ぐらいにすぎず、稀れには消失している。

2) *T. wolteri* との比較

T. wolteri は背板8列をもっているが、眼上板・上脛板間の粒状鱗のようすはむしろ *T. tachydromoides* に似ており、鼠蹊孔は1対と記載されている。SCHMIDT (1927) は中国 Ningkwo産の60頭を調べて、大型背板8列のもの53頭・7列4頭・9列3頭であり、鼠蹊孔数は非常に安定して全個体が1対をもつとしている。

3) *T. amurensis* との比較

T. amurensis は基本的には8列の背板、3対の鼠蹊孔をもつとされているが、WALLEY (1962) などによれば背板列数・鼠蹊孔数共に数の多い方へ変異の幅がのびているようである。また、前記の粒状鱗の数は *T. tachydromoides* にくらべて少なく、列をつくらないとされている。

このようなことから、比田勝標本は *T. amurensis* と考えられる。

上記3種の鱗板の諸特徴も、1形質の幅だけをとりあげれば、近似種間で互いに重なり合ってしまうであろう。しかしその頻度や組み合わせを考えると、種の特徴として重要となってくる。今後は鱗の配列の発生学的な形成過程を検討することが望まれる。

IV. 隣接地域の近似種とその分布

対馬対岸の朝鮮半島には、もっとも多くの *Takydromus* 属の種がいることになっていて、SHANNON (1956) によれば *T. amurensis*, *T. wolteri*, *T. auroralis*, *T. kwanguensis*, *T.*

* これはいわゆる“鱗孔”をもっており、これが感覚器の受容面であるとすれば、その増減は粒状鱗自身の増減に関連してくる。

tachydromoides の5種が記録されている。最後の *T. tachydromoides* は OKADA (1933) にもとづくものであるが、恐らく誤記によるものであろう。*T. auroralis* DOI は最近 WALLEY (1962) によって検討が加えられた結果、*T. amurensis* のシノニムとして整理された。次に *T. kwangakuensis* DOI は大型背板が7列あること、咽頭板は4対であるが前方の3対は互いに接し第4咽頭板で左右に離れていること、鼠蹊孔が4対あることで *T. amurensis* と区別して記載された。しかしこれらの特徴が *T. amurensis* の変異の中に含まれることはほぼ確実で、これもシノニムとして整理すべきものと筆者は考えている。

一方、日本本土およびその周辺からは *T. tachydromoides* のみが、中国中部以北からは、*T. wolteri** が知られている。

結局、*T. wolteri*、*T. tachydromoides*、*T. amurensis* の3種が属の分布圏の最北端に位置し、1つの species group をつくりつつあるようである。大たんな推定が許されるなら、これらの母型にもっとも近いのが *T. wolteri* で、ついで *T. tachydromoides* が分化し、*T. amurensis* はもっとも新しく分化して北へ分布を広げたのではなかろうか。

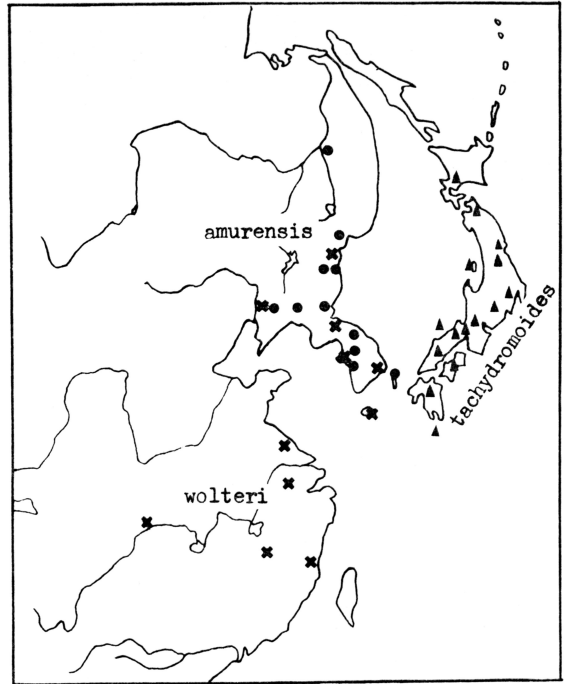


Fig. 1, Distribution of *T. amurensis* and allied species

参 考 文 献

- BOULENGER, G. A. (1917): A Revision of the Lizards of the Genus *Takydromus*. Mem. Asiatic Soc. Bengal, 5, pp. 207-235.
- NIKOL'SKII, A. M. (1915): Fauna Rossi i sopredel'nykh stran. Presmykayushchiesya, I, pp. 1-523.
- POPE, C. H. (1935): The Reptiles of China. Natural History of Central Asia, X, Amer. Mus. Nat. Hist., pp. LII, 1-604.
- SCHMIDT, K. P. (1927): Notes on Chinese Reptiles. Bull. Amer. Mus. Nat. Hist., LIV, pp. 467-551.
- SHANNON, F. A. (1956): The Reptiles and Amphibians of Korea. Herpetologica, 12(1), pp. 22-49.
- SLEVIN, J. R. (1925): Contribution to Oriental Herpetology II, Korea or Chosen. Proc. Calif. Acad. Sci. Forth Ser., XIV (5), pp. 89-100.
- STEJNEGER, L. (1907): Herpetology of Japan and Adjacent Territory. Bull. U. S. Nat. Mus., 58, pp. I-XX, 1-577.
- WALLEY, H. D. (1962): The Identity of the Korean Lizard, *Takydromus auroralis* DOI. Herpetologica, 18(3), pp. 215-216.

* *T. wolteri* はその分布圏の南部で *T. septentrionalis*、*T. sextineatus* のそれと重なっているが、この2種は別の species group に属すものと考えられる。